

心の故郷

(平成25年卒業ゆとりの星)

BN 1267 山脇 英明



進 隅 廉 字 題

第 62 号

明 治 大 学 体 育 会
ワンダーフォーゲル部
な た め 会 会 報

令和2年10月、臨時のOBワークに参加した。例年だと6月頃に行われるが、令和2年度は新型コロナウイルス感染拡大の影響で10月上旬にずれ込んでの開催となった。

奥鬼怒山荘（以下、手白小屋、手白、小屋など）に来たのは実に4年4ヶ月振りだった。数年おきに小屋には来るが現役のとときとなら変わらな...いや、新しい木材が融合されていて新旧を表す小屋になっていた。

1年半前、手白小屋の屋根に大木が倒れ、1階の広間が使用不可能になったと聞いていたので、無事小屋が再建されていて嬉しかった。不思議なもので現役のとときよりもOBになつてからの方が小屋に対しての愛着が増した気がする。国有地の中に小屋を持っていること自体が誇らしい。

今回のOBワークは台風が近付いていたこともあり、1日目～2日目の昼までは天気は



恵まれなかった。雨が酷いときは小屋の中でコーヒーやお酒を片手に近況や昔話をしながらときを過ごした。囲炉裏を囲んで談笑するという何気ないひと時が、とても懐かしくかけがえのないものに感じた。

雨が弱くなってきたときは、水源の手入れや小屋周辺のメンテナンスを行った。私は同期の岩田とともに水源の手



入れをしたのだが、想像以上に水の出が良かったので嬉しかった。

2日目の昼、後発組が小屋に到着してしばらくすると天気が回復してきたので、本格的にワークに取り組むことにした。五八新道の新助沢への下り手前の山道が巨大な倒木によって分断されていたので、倒木をチェーンソーで小さく切断して木材にし、薪用で使うため小屋まで歩荷を繰り返した。3日目の昼には薪小屋いっぱい木材を運び終え、山道も綺麗になった。



山々をよじ登ってしか行けない、電波が届かないところ。そんなところで火を起こし、薪を割り・運び、水源を確保し、囲炉裏を囲んで談笑する。最近こんな日常を味わってなかったので、久々に生きているという感じがした。

毎日ただ働いていると人間らしさが失われ、生ける屍になる。山に来ると自分の心臓、息づかい、汗、気持ちのいい疲れや空腹、街中では忘れがちな様々な感覚によって人間らしさが思い出せる。普段は美味しくないイ

ンスタントコーヒーだってこんなに美味しい。

今の社会は、新たな生活様式や働き方改革等の影響で、昔よりも効率よく生きていくことを求められている気がする。一生懸命に働いて、学んで、色んなコミュニティに属して…頑張ることは大事なことだ。

ただ、ふと立ち止まったとき、心の余白がなければ、自分はどうありたいのか分からなくなる。そんな心の余白をつくってくれるこの場所、いつまでもあってほしい。

令和2年12月31日現在、東京都内の新型コロナウイルス新規感染者数が1300人超となっていました。いつになったら当たり前の日常が戻ってくるのか。学生たちが気兼ねなく小屋を訪れることができることを願っている。

奥鬼怒山荘OBワーク

〈参加者〉

10月9日～10月11日(2泊) OB8名

661 大賀・705 杉山・751 諏訪本・846 植木・1064 井上

1265 岩田・1267 山脇・1282 諏訪部

10月10日～10月11日(1泊) OB2名

1115 上原・1330 奥山

孤高の犬・ビッキーに逢うために

BN 776 高島 昇

8月最後の日曜日、日帰り登山に行ってきました。少し前に新しくモンチュラのローカット(山靴)を買い早くどこかに登りたく

二度目となる近場の山に決めた。場所は、中央本線・初狩駅(無人駅)から歩いて登れる「高川山(976m)」という秀麗富嶽十二景に選定されている山である。ご存じの方もいるかも知れませんが、以前、この山は別な理由で登山者の間で有名になりました。

それは、2001年頃から登山者から「ビッキー」と呼ばれ、首輪をした雑種犬が山頂付近に住みつき、人々からごはんや水を貰っていたそうです。人には一切危害を加えることはなく、何人もの登山者が自宅で飼いたいと大月市役所に依頼し捕獲を試みましたが駄目だったそうです。

山頂近くになるとビッキーが静かに現れ、近づくわけでもなく登山者の前や後ろをついて歩いてくれたそうです。頂上に着いたビッキーは岩に立ち、登山者からご飯やおやつを貰い、飢えを凌ぐも頭や体を撫でさせることは決してなかったようです。下山する時は道案内のごとく先を歩き、下から登山者が来ればその人たちとまた山頂へ登って行ったそうです。

常に一定の距離を保ちながらも多くの登山者に愛され、このような光景が約10年続き、2010年10月のある日、山頂近くで亡くなっているのが発見されたのです。ビッキーは、麓のお寺の高川山を望む大銀杏の木の下に葬られました。今は、その銀杏の根元にビッキーの姿を彫った石の墓標も作られています。私は犬を飼い始めて11年近くになるが、



在りし日の「ビッキー」 20071229 前原山行会

涼しくなれば、うちの犬も登れるだろうかと想像しながら、今回は、山頂手前の分岐で男坂を選択して登っていきました。

今でも山頂には元気だった頃のビッキーの写真(アルバム)が木箱に保管され、誰でも手にとることが出来ます。自分の犬とダブらせながら見ていると、違ったことがないのに何故か懐かしく思え、真夏の山頂で汗と涙がしばらく止まりませんでした。少し遅れて山頂に着いた同年代の男性はビッキーの話を

知らず、開いていたアルバムを見せながら「昔々、ビッキーという犬がいて…」と解説をしたら凄く感激されていました。

ビッキーが山に住みついた本当の理由は分かりませんが、「ビッキーはずっと飼い主を待っていたんだろう」と言う人が多く、自分もそう思うことにしました。

新しい山靴は予想以上に軽快に歩け、重い靴はしばらくお休みをしようと思っていま

夏合宿

BN 717 住田 孔一

コロナ禍、暇なので自作で部屋の壁紙を杉板で貼り替えた。山小屋風の部屋には友人から貰った雪の大雪山の水彩画と白山夏合宿(1971年)の記念ペナントを飾りました。ペナントを見ているうち、一年の北北海道夏合宿を思い出し、時も経ち覚えている事が断片的で前後が繋がらないので、当時の部誌を先輩にお借りして記憶を辿った。

私は夏合宿から入部したため経験不足と準備不足でとにかく苦しかった。この過酷な体験は行動を共にした者しか分からず、他の人には退屈な話も一度は記録して整理して置きたかった。

その年の夏合宿は各班が北海道北部に分散山行し深名線(名寄―深川・1995年廃線)の路の台第一次BC・朱鞠内湖第二次BCに



集結する計画であった。

我々六班の班別行程は宗谷本線音威子府駅で天北線(音威子府―南稚内・1998年廃線)に乗り換え申別から兵知安川を遡上しポロヌプリ山(841m)に登り宇曽丹部落を経て常盤から浜頓別に至るコースであった。チャーターした車で林道の終点まで行き背丈程ある路の傘をかき分け兵知安川を遡上し何度も渡渉を繰り返した。荷物が重く苦しいので下ばかり向いて歩いた。単調な川歩き中、一升瓶や飯場跡(明治時代の山師が砂金

探しで使用した、釣り人の野宿用の木組みを見つけると、こんな山奥にも人が入り、人の営みの残置された遺構に気が紛れたものでした。

渡渉で転ぶごとにザックから小麦粉の混じった白い液が滴り落ちる、食料カートンや着替え、寝袋をビニール袋で包んでいなかったのが初日から濡れた冷たい寝袋で寝る羽目となってしまった。稜線に突き上げる枝沢に登り、今度は根曲がり竹に翻弄された。藪山でニツカボツカはあり得ない、初めは靴下がすり落ちる度に直していたが、直す余裕がなくなると根曲がり竹が両脛にあたり傷だらけになった。

合宿中、毎日雨が続き寒く、夕飯の支度も大変だった。火がなかなか点かず常に11時頃まで掛かった。火の傍の温かいところは占領されて譲ってもらえず、火持ちの悪い枯竹集めを何度も繰り返した。

竹藪を漕いで300m進むのに1時間もあり目指すポロヌプリ山はなかなか現れない。

この辺から記憶が曖昧でポロヌプリ山の頂上の景色も思い出せない。日数の制限、メンバーの疲労からコースを変更して沢を2日下り、酪農が盛んな宇曾丹部落の常盤を目指すことになった。林道に出ると沢でふやけた足と長いロードですぐに底豆ができ皆から遅れた。後ろについたリーダーの叱咤激励でやっとの思いで常盤に着いたが最終バスが出た後

で、停留所の脇で一泊することになった。先輩から元気づけに歌の指名を受けた千波君は連日の強行軍で綺麗な顔もやつれ、震えて歌う「小樽の人よ」は哀愁に充ちていたものでした。

翌日バスで浜頓別に行き駅舎には八月なのにストーブが点けられ、暖をとっていると異様な風貌からかインパール作戦みたいと言われた。参加した数万の兵士が殆ど戦死した無謀な指揮官より、規模は小さくとも我がリーダーの指示は的確であった。

解散後、利尻・礼文の山行を計画していたが、怪我でそれも叶わず一目散で東京に向かった。替えの私服も山のどこかに置き忘れて、家に帰るまでずっと来た時と同じ服を着ていた。

あれから47年、深名線も天北線もダム建設の終了、林業の衰退など経済的原則から既に廃線となっていた。ポロヌプリ山、残雪期であれば4、5時間で行ける山、藪を漕いで奮闘した三日間。後日商用で稚内に飛んだ折、眼下の山塊ポロヌプリ山を目で追ったがあっけなく通り過ぎ、思わず笑ってしまった。リーダーが何故こんな辺鄙でマニアックな山を選んだのか、一度聞いてみたかった。

60歳からの挑戦

BN 846 植木 進

最近3種類の名刺を持ち歩いています。

一枚が山岳ガイドの名刺。二枚目がツアー会社のスタッフ名刺。そして三枚目が母校明治大学校友会群馬県支部幹事長の肩書き。

山岳ガイドについては、50歳を前に訪れた屋久島でガイドが活躍する姿を見て、いつかは自分もという思いを持ち続けてきました。早期退職も考えましたが、辞める踏ん切りがつかずズルズルと定年に……そこで一念発起、余りある時間をフルに使ってガイド資格の取得に挑戦しました。

取得できたのは「日本山岳ガイド協会認定登山ガイド」と「尾瀬ガイド協会認定尾瀬自然ガイド」の二つの資格。さらにこれに加え、学生時代になかなか合格できなかった日本赤十字社救急員やツアーに必要な添乗員資格も取得。やればできるもんだ！

そして現在の業務。昨秋地元桐生市で山岳ツアーを中心に行う旅行社に採用となり山岳ガイド兼添乗員。近年自分は趣味の山岳写真の撮影を併せると年間50日前後は山に入っていますが、お客様のの中には「日本百名山」完登とかの強者もいらつしやるので話をしているだけでも楽しい。ただ、朝が早いのが辛い。ツアー当日に遅刻したり体調不良を起こしたりでは添乗員として×。今まで経験したことのない緊張感があります。同業種を全うした同期井村君の苦勞が身を持ってわかりますね。

一方の尾瀬自然ガイドの業務は、例年群馬



県内の小中学校で開催する「尾瀬学校」での引率とガイドが中心。ところが昨年はコロナの影響で自分に割り当てられた学校は全てキャンセルです。中には感染対策を徹底して参加している学校もあるので今年は期待したいですね。なお、尾瀬に関しては、検定に際してその自然や歴史をそこそこ学習しています。なため会員の皆さまで興味がありました

ら気軽に声をかけてください。ガイド料なしで尾瀬をご案内いたしますよ。

最後に三枚目の名刺の校友会ですが、現在4年任期の2年目です。多少時間はとられますが、各界で活躍する校友諸氏との親交が得られることは自分にとって大いにプラスです。会長の北野大氏をはじめ岡山県支部長で木下サーカス社長の木下唯志氏には名刺交換の折に名刺が途切れてしまい、後日ご丁寧に名刺とともにサーカスの招待券を贈ってくださいました。その恩義もあって、今回コロナ禍で興行できない木下サーカスへのクラウドファンディングに参加させていただいた次第です。

以上近況報告です。同期の皆さん！たまには山に登りませんか？

*連絡先 ☎090-4057-4032

■企画振興部からのお知らせ

企画振興部では、新型コロナウイルス感染拡大を受けて、昨年2月15日「第72回東京ワンデルング」を最後に企画を中止しておりますが、残念ながら、本年1月時点におきましても状況は変わらず、改善の兆しはありません。

従いまして、来年度におきましても、当面は企画を中止して改善を待ちたいと思います。楽しくワンデルングができる状況になりましたらお知らせいたしますので、暫くお待ちください。

企画振興部長 丸山 貞一(859)

■投稿募集のご案内

薫風では幅広い世代の皆様からの投稿をお待ちしています。

「テーマは問いません」

山やワンデルングにまつわるお話などに囚われず、趣味の世界や日常生活でのちょっとした出来事など、あらゆるジャンルのお話をお待ちしています。

特にコロナ禍の今は外出も控えがちだと思われませんが、長引く自粛生活をどのように過ごしているとか、これまで気づけなかった新たな発見があったとか、今しか書けないお話があれば、是非お聞かせください。

※原稿用紙3枚程度にまとめていただくと助かります。

「投稿のスタイルも問いません」

写真に簡単なコメントを付けてご投稿いただくだけでも十分です。

今号でも次頁に「ワンダーラーのフォト日記」と題したスナップ写真のコーナーを設けていますので、是非お気軽にご提供ください。

【締め切りについて】

第63号(本年7月発行予定)について
期 日: 6月30日(水) ※必着でお願います

送付先: 広報推進部 井上 稔也(879)

住 所: 〒176-0022 東京都練馬区向山4-12-16

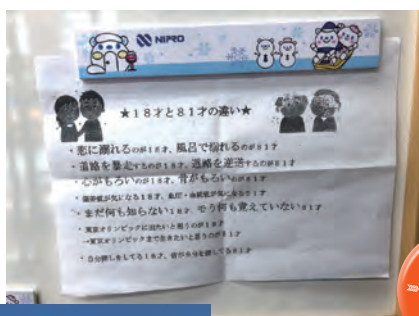
電 話: 070-5466-1152

メール: maromaro.marom8@gmail.com

※Faxでの送付をご希望の方は電話番号が別になりますので、上記電話またはメール(ショートメールでも可)にて一報ください。

ワンダ ラの フォト日記

with コロナ編



BN.896 山口 正

いつも血圧の薬をもらう
薬局の白板に貼られている
のを発見。今は笑える
けど、笑えない日がすぐ
来そうで怖い ^_^

2020
11月28日
山口

2020
4月12日
山口



BN.896 山口 正

コロナ禍快晴の三笠公園で
記念撮影! 天気晴朗なれど
波高し~
東郷平八郎元帥カレンダー
を購入、2021年の安寧を
祈ります (^_^)/

2020
12月16日
猪狩



BN.835 猪狩 稔

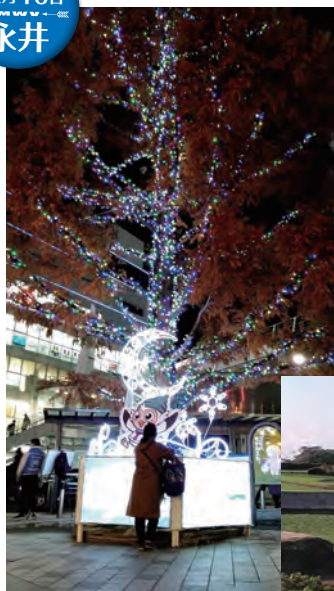
今年はコロナ禍で何も出来ません
でした。そんな中でコットンを育
ててみました。コットンボールの
収穫ができ、結構嬉しいです。

2020
8月9日
河原崎



BN.
899 河原崎 奈津子
夏の鎌倉山歩き。苔のきれいな
谷戸にて。

2020
12月16日
永井



BN.892 永井 正道

馴染みの酒場で、アクリル
板に向かい一人酒。ほろ酔
い気分店で出ると、ツリー
が目の前でした。

2020
11月21日
永井



BN.
892 永井 正道
三浦の大根畑
小春日和

2020
11月28日
河原崎



BN.
899 河原崎 奈津子
葉山は冬でも夏の雰囲気…。

〔新執行部紹介〕



芝本 真都
(しばもと まこと)
会計、3班 SL、トレーニング・手白係
文学部史学地理学科
横浜市立金沢高校



斎藤 慎太
(さいとう しんた)
主務、4班 SL、衛生・手白係
商学部商学科
都立日野台高校



渡邊 延暁
(わたなべ のぶあき)
主将、1班 PL、装備・気象係
経営学部経営学科
都立東大和南高校



伊藤 秀領
(いとう ひでたか)
4班 PL、手白係
理工学部応用化学科
明大中野高校 (東京)



市川 拓真
(いちかわ たくま)
3班 PL、装備係
文学部文学科
青稜高校 (東京)



柴丸 貴
(しばまる たかし)
2班 PL、針生係
理工学部数学科
神奈川県立湘南高校



相磯 匡輝
(あいそ まさき)
2班 SL、編集係
農学部農学科
成城高校 (東京)



三石 遼
(みついし りょう)
1班 SL、広報係
理工学部電気電子生命学科
鶯谷高校 (岐阜)



田中 雄基
(たなか ゆうき)
1班 SL、装備・衛生係
農学部食料環境政策科
サレジオ学院高校 (神奈川)

■令和2年度活動方針

〔部の基盤の構築・整備〕

●安全登山の遵守 (◎)

山にかかわる活動をする上で第一に考えなければならぬのが安全である。数年前にも滑落事故が起きており、事故のリスクとは常に隣り合わせの活動であることを再認識する必要がある。リーダーが安全な企画を立案するのは勿論のこと、部員各自が安全登山を意識し、事故に対する備えを行う必要がある。

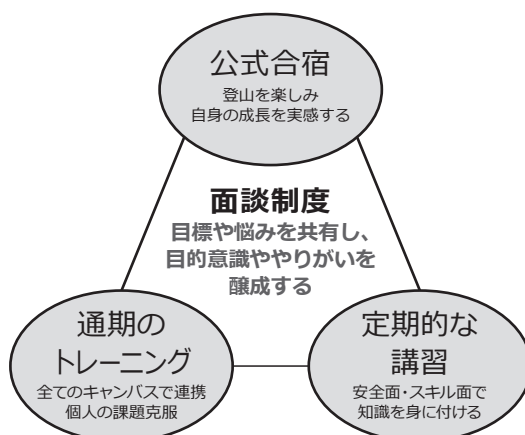
●1人1人が部活動に対して目的意識を持つ

現状、活動に対する姿勢が部員各々によって異なっている。もちろん大会などがない特殊な本部活動において姿勢や考え方が異なるのは当然だと考えている。しかし、目的意識なく部活動が続ける者が多いために、部の発展に主体的に取り組む人材が少ない点は長年の課題であると考えた。執行部として部員1人1人が短期・中期・長期的目標を持つことをサポートする体制を構築する。そして大学の体育会として、更なる発展を遂げるための基盤整備に尽力する。

●登山の基礎スキルの定着

本部では部員間で登山スキルの差が大きく開いてしまう傾向がある。ある程度の能力差は仕方ないものの、トレーニング・講習の積極的な参加や合宿に対する準備を徹底し、上級生から定期的な指導を受ける機会を作ること、基礎的な能力差は防ぐことができる。昨年は、新型コロナウイルスの影響で活動を行うことが出来なかったため、部全体の基礎的な登山スキルが定着していない。今年度は年間を通じて取り組みを行うことで部員全員が基礎スキルを体得することを目指す。

【執行部施策】
上記執行部方針の実現のため下記の施策を実施します。



一人一人が部活動に対して目的意識を持つ

●面談制度の新設

定期的に上級生と面談を行う制度を新設する。面談では個人の目標設定（短期・長期）や悩みの共有などを行い、①強い縦の関係の構築と②部員一人一人の目的意識の醸成・主体的な人材の開発を目的とする

※原則、面談は3役（主将・主務・会計）とPLが担当する。

〈登山の基礎スキルの定着〉

●前提

昨年と同様、補習山行の実施を徹底する。個人

山行に関しては3年の積極的な企画を推奨する。ただし、安全面の考慮から企画書の添削は4年に必ず行ってもらうとする。

●4キャンパスで連携したトレの新しい仕組みの導入

現状、和泉のトレは機能しているものの、生田・中野のトレは形骸化してしまっている。そのため、制度や仕組みをもう一度見直し、新しい制度を導入することとした。基礎体力・スキルの向上と強い横の関係の構築を目指す。またGoogleドライヴなどを活用し、キャンパスごとの出席率の管理、トレの内容の確認を一括で行えるようにする

2021年度現役指導スタッフ紹介

●部長 高橋 信勝

●監督 諏訪本充弘 (75)

●コーチ 井上 堅一 (106) 岩田 卓也 (265)

浜口小百合 (127) 諏訪部貴亮 (128)

由水 雅也 (130)

現役部員数

準OB	10名	(男7名 女3名)
4年	9名	(男8名 女1名)
3年	16名	(男13名 女3名)
2年	17名	(男13名 女4名)
合計	42名	

年間行事予定

2020年 10月 ワークW→中止

(OBワークを代替実施)

11・12月 秋合宿→日帰りW実施

(道志山塊他)

2021年 2月 スキー合宿→中止

3月 春合宿→日帰りW (予定)

4月以降の活動は現時点ですべて未定

■主務連絡先

斎藤 慎太 0800-5403-7428

wanngeru@gmail.com

■山小屋を利用したい方へ

左記の現役小屋係まで連絡願います。

○奥鬼怒山荘 (手白小屋)

伊藤 秀領 0900-5763-6369

ee186034@meiji.ac.jp

○針生山荘 (針生小屋)

柴丸 貴 070-1008-4228

pk_taheshi20@softbank.jp

〈料金〉学生5000円 OB10000円

一般20000円

手白は別に1泊20000円の燃料チャージがかかります (一人でも団体でも20000円)。

注：山荘の使用は小屋係を通しての申し込みが大原則ですので、必ず守ってください。一般のみの使用はできません。OBまたは学生の同行が必要です。



2020
9月7日
小林

BN.898 小林 香織

今日は影絵のような鳥海山！
もう稲刈りを始めているところもありました。



2020
9月12日
関口

BN.888 関口 健二

秋晴れの日
魚津の実家で稲刈りのお手伝い
昨日までは時々俄雨
だったようです

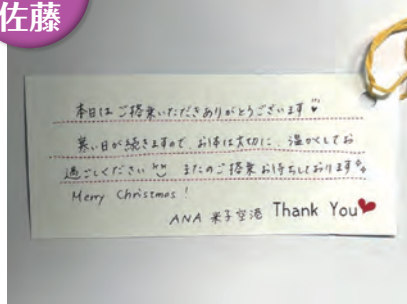


2020
11月22日
小林

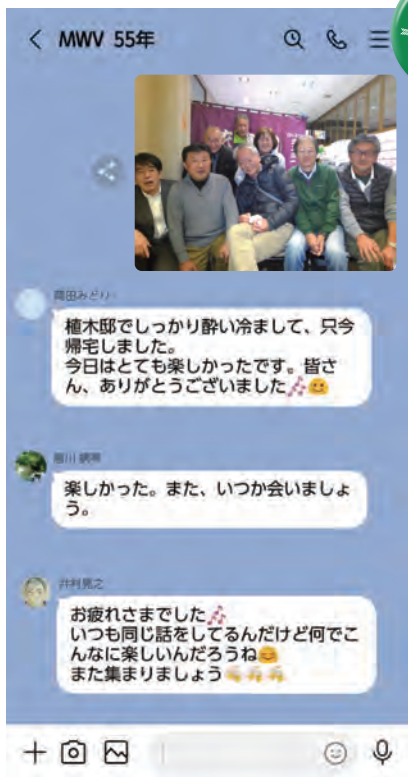
BN.898 小林 香織

晩秋の一日、小安峡の秘湯に行ってきました。

2020
12月25日
佐藤



BN.886 佐藤 伊津英
羽田で受け取った荷物に手書き
のタグが付いていた
なんかうれしいね！



2020
12月2日
加藤

BN.845 加藤 章一

大倉先輩 (BN822) の
「花寿司」で関東の同期
で同期会。昼でマスク
会食です (笑)。久しぶ
りに腹がねじれるほど
笑いました。
(花寿司が再開発で一
旦閉めるとのことです集
まりました)

BN.879 井上 稔也
都下唯一の「村」に見つけた草鞋地蔵。
ワンダラーの聖地！



2020
8月14日
井上

2020
9月9日
井上



BN.879 井上 稔也

お台場であった息子の結婚式
の翌日、カミさんとレインボー
スリッパをワンデルング。
なかなかの眺めでした (^^)v

『単身赴任』五十半ばからのすすめ

BN 888 関口 健二

コロナと熊が怖くてこの一年「山歩き」は無し。『これじゃ駄目だ』と半年前から車を捨て「歩き通勤」に変えた。ザックに着替えと弁当を詰め込み、どこから見ても誰が見ても「山行く格好」で往復2時間歩いている。人生のカウントダウンが始まった中で、一日2時間は貴重だが、カメラ片手に定点撮影し、マンウォッチングし、四季を感じながら歩く発見も多く、思う事あればヴォイスレコーダーに語りかけ、ブログネタを探し、時に自分を問い、世間を問い、そして反省し、ナニより日常を愉しみながら歩いている。

「歩く楽しみ」に目覚めたのは五十も過ぎ、神奈川県藤沢に単身赴任してから。神奈川の山々を歩き、赤坂から大山街道を走破し、三十三観音を訪ねて三浦半島海岸線を歩く。歩けば八百年前の「中世」にタイムスリップ。頼朝に始まり後北条、新田義貞、三浦大介義明、曾我兄弟に坂東八平氏。思いは陸奥から肥前まで日本を駆け巡り、遅まきながら「太平記」「吾妻鏡」を読む（中央公論新社『マンガ日本の古典』でだけどね笑）。

葉山の海と富士、佐島の夕陽、荒崎シーサイドコース、三浦大根と三崎の鮨、宮川湾の海食台、剣崎からの房総、三浦海岸の風、浦賀の廃校跡、雨の観音崎、鷹取山からの横須賀。行った人にしかわからないシーンですが、



三崎港からの相模湾と富士

アン王女になったつもりで『いずこの地もそれぞれ、忘れがたく、比較は難しいと…相州です、なんと申しまして、相州です。この地の素晴らしい思い出を、生涯忘れないでしょう』。

住所移して四半世紀。今は北陸三十三観音を車で巡っている。旅先で地酒をやる楽しみは無いが歴史はある。行けば新しい発見があり回り回って「今の生活」に興味が出る。

世の中「歴史」を知らなくても生きて行けるが知っていれば「もっと楽しく」生きて行ける。お薦め参考書は「〇〇県の地名」（平

凡社）。ネットで古書が五千円程度で売りに出ているので買っというて損はない。読むだけで驚きの連続だ。出発前に読んで、帰って来て読めば『えー！そうだったの？』『ここで繋がるわけね』『世の中、面白いわ』『さあ次の休みはどこへ出掛けよう』となる。『GOTO』なんぞで人が集まる場所ので疲れ果て帰って来るより、楽しい旅を続ける事が出来る。

もうちょっと早く「歴史」に触れていたら、真面目に勉強して文学部史学地理学科を目指していたな。でも今からでも遅くはない、シュリマン目指して歩くぞ。

最後に注意事一つ。通帳とキャッシュカードは奥さんに渡して単身赴任しましょうね。「自由になるお金」で身を持ち崩した人、何人か知ってますので…。永六輔さんが書いてました、「お布施は『ちよっと多い』くらいが。子供と旦那の小遣いは『ちよっと少ないくらい』が丁度いい」だそうです。

さあ1時間早起きして次のバス停まで、そして手前の駅から歩いてみませんか。新しい日々が始まりますよ。

皆さんの「新しく楽しい日常」報告、井上編集長とともに次の薫風で待ってます。

三年後は「迷故三界域」「悟故十万空」「本来東西無」「何処有南北」、四国を歩こうと資料取り寄せ計画中。御縁ありましたら「接待」受付中です笑 by 三界の迷い鳥

炭焼きのすすめ

BN 751 諏訪本 充弘

私の生活は知る人ぞ知る半農、半保険屋、時々ワンゲル指導という生活ですが、昨年の5月の連休にいつもは道志に来る部員、コーチ、若手卒業生などもコロナで全く来なかったのも何もやることがなく、4月の最初に枝打ちした樺を、かつて私が通った道志小学校・久保分校（現「みなもと体験館」）に同級生の半田博敏君が作った炭窯で炭焼きをすることにしました。

そこに現れたのが、数年前に都留文科大学を卒業して現在道志村の嘱託をしている香西恵女史。彼女が編集する地元誌「道志手帖」で取材させてくれたのことで、出来上がったのが以下の記事です。OB会誌に載せてもいいと香西さんには快く許可をいただいたので、多少なりとも炭焼きの面白さを感じていただければと思います。

炭焼き日誌 @みなもと体験館



5月5日（火）、みなもと体験館道志・久保分校へ行く。炭焼き窯に火が入っていた。真新しい薪がくべられ、煙突からはうっすらと煙がでている。改めて見ると、窯の脇にはいろいろな道具が用意され、目の高さには板が吊るされていて、過去の炭焼きの記録が参照しやすいように貼りつけてある。どうやら今まさに、炭を焼いているところらしい。

これまで何度も訪れてきたけれど、窯が使われているところを見たのは初めてだ。

炭焼き窯がこの場所に来たのは平成27年3月、今から5年前のこと。

体験館を運営している「道志村子ども農山漁村地域協議会」では、当時、炭焼きや養蚕、祭りや伝説など、かつて村で盛んだった産業や、村に昔から伝わる文化を紹介するリーフレットを作成していた。そのなかで、消えていく炭焼きの技術を残していきたい、という声があがり、体験館に炭焼き窯をつくることになったそうだ。

これまで、冬になれば職員が窯を使い、炭の焼き方を研究してきた。そのさいにお客さんに窯から炭を取り出す体験をしてもらったり、できた炭を食の体験（※）に使ったりなどしてきたが、炭焼き自体を体験イベントとしておこなったことはなく、職員以外の手によって窯が使われるのは、なんと今回が初めてのことらしい。

例年なら5月の連休は体験館の繁忙期で、山菜採りやうどんづくりの体験などで賑わうはずなのだが、今年は新型コロナウイルス感染症の対策で3月末から休館し、せっかくの気持ちのよい季節にお客さんの姿はない。

たまたま炭焼きの最中に出会ったご縁に感謝しつつ、炭が出来あがるまでのようすを見せていただいた。

炭焼きをおこなったのは、大室指地区の諏訪本充弘さん（68）。書店で見つけた一冊の

※うどんやピザ、バームクーヘンづくりなどの体験を通年でおこなっている。バームクーヘンは、生地を焼くさいに炭を使う。

本をきつかけに炭焼きのおもしろさを知り、自宅にドラム缶窯をつくって炭を焼いたり、自家製の炭でバーベキューを楽しんだりしてきた。このたび自宅の防風林を伐採し、炭にしたらよさそうな材がたくさんでたが、長年使ってきたドラム缶窯が壊れてしまい使えない。そんな折りに、人づてに体験館の窯の存在を知ったという。

炭にする材は、おもにケヤキで、少しカシも混ざる。90センチに切った材を縦にして窯の奥から詰めていくと、軽トラック2杯分もの量が入ったという。入り口上部をレンガでふさぎ、火を絶やさないうよう、薪をくべ足しながら、窯全体の温度が上がるのを待つ。

通常なら3日ほどで焼き上がるのだが、3日目の5月6日(水)になっても、窯の温度(※)が思うように上がらない(午後2時半頃の時点で70℃)。次第にたくさん出てくるはずの煙の量も少なく、うつすらとしたままだ。

5月7日(木)、まだまだ温度が上がらない(午後2時半頃の時点で80℃)。焚き口に板をさして、入り口をせめてみる。

5月8日(金)、朝9時半ごろの時点で40℃まで下がっていた。番をしなかつた夜のうちに火が消えてしまったらしい。その後、100℃近くまで上がった。

5月9日(土) 6日目、朝8時半の時点で前日の火は残っていたものの、また消えかけていた。1時間後に90℃まであがる。

※窯の甲(天井)部分と煙突にそれぞれ温度計を設置している。ここでの窯の温度は甲部分の温度のこと。

職員の池谷謙さんによると、窯の奥の煙突へつながっている隙間が土などで埋まってしまい、空気の通り道が塞がってしまったているのではないかと、とのこと。そうだとすると、いくら薪を燃やし続けても意味がない。

中を見ると、手前までぎっしり詰めた材が全然燃えていない。ふつうなら、焚き口に近い手前のほうから燃えていくはずだ。

一旦火を消し、冷ましてからもう一度材を全て取り出し、やり直した方がよいのではないかと判断する。しかし下手をすると材の乾燥具合によっては、炭にならずに灰になってしまうかもしれないという(一)。炭にするには木材に適度に水分が必要で、ありすぎても駄目、乾燥しすぎても駄目らしい。

次の日、予定を再度変更し、そのままもう一度火をつけて様子を見ることになった(朝10時頃の時点で40℃)。今度は、薪と材の間に設置していた、火が燃え移らないようにするためのレンガの仕切りを取り払い、さらに扇風機で風を送り、奥まで風が通るように工夫した。これで1日様子を見て、温度が上がらないようであれば諦める、とのこと。

諏訪本さんはドラム缶窯では何度か炭を焼いているが、このレンガ窯では初めてだ。

一口に炭焼きと言っても、窯が違えば焼きかたも違う。窯が温まるまでの時間や保温の具合、空気の通りかたなど、様々な要素が変わってくるからだ。さらに材の樹種や含水量

によっても違いが出てくる。窯の違い、風の違い、材の違いによって、一回として同じにはならないのだ。

この窯にはある程度確立されたやり方があるが、それをそのままなぞったからといって同じようにうまくできるわけではない。焼きながら、その都度、今どういう状況になっているかを判断し、それにふさわしい世話をする必要がある。窯の中の様子は見ることができないから、温度や、煙の色や匂い、量を見て想像するしかない。そこが炭焼きの難しいところであり、面白さでもあるのだ。

「もっと教わっておけばよかった」と諏訪本さん。1965(昭和40)年頃まで、諏訪本さんの叔父さんが炭焼きを生業としていて、子どもの頃には手伝ったこともあったそうだ。

生業としての炭焼きは、山を移動しながらおこなう。山中に石積みみの窯をつくり、周囲に木がなくなれば次の場所へ移り、そのつど新しい窯をこしらえる。竹之本の加入道山のほう、馬場、椿など、あちこちで焼いていたという。山中では、炭を取り出したらすぐ、温度が残っているうちに次の材を詰めるなどのこと。また、家を片付けていたら、炭俵を編むための道具(桑の木片)が出てきたとか。

諏訪本さんに炭焼きにまつわるあれこれを伺っていると、一言前の炭焼きが、具体的に

想像できるものとして少し身近に感じられてくる。

工夫の甲斐あって順調に窯の温度が上が
り、火をつけ直してから4日目、5月13日
(水)の朝には200度を超えた。煙が出な
くなつたのを

5月17日(日) 14日目(火を消して5日目)

確認し、焼き
上がったと判
断して火を消
す。入り口を
しっかりとレ
ンガで塞ぎ、
煙突を取り外
して穴を土で
塞ぎ、空気が
入らないよう
に、できるだ
け密閉する。
そのまましば
らくおき、完
全に中が冷め
てから炭を取
り出す。



ふるいにかけ灰を落とす



窯の温度 30℃。
入り口のレンガをくすすと……



ふるったものを米袋へ。
米袋5袋程度になった



奥のほうに残っている

す時がきた。
この窯の作り手である久保地区の半田博敏
さんも見守る中、いよいよ窯を開ける。入り
口のレンガを崩し、中を覗き込むと、奥の方
に白く灰を被った材が元の形を保ったまま
残っていた。手前の4分の3ほどは崩れ落ち
ている。崩れているものを取り出し、白い灰



断面に梅の花模様。
形のよいものは贈答用に

完成！

本誌では、以前炭焼きについて特集したこ
とがある(『道志手帖』7号、2015年発行)。
昭和30年代、村において炭焼きは貴重な現金
収入源であり、なくてはならない産業だった。
誌面では、今も残っている炭焼き窯や炭俵を
手がかりに炭焼きの記憶を聞き取り、それに
まつわる写真等とともに紹介した。そのとき
には、昔の記憶を辿ることはできても、現在
進行形で炭を焼いている人にお話を伺った
り、炭焼きのようすを見せってもらうことは叶
わなかった。

を払ってみると、灰の下からのぞく材の色や
質感は、紛れもなく炭だ。のこぎりで真っ直
ぐに切れば、断面には炭特有の梅の花の模様
が現れて美しい。
一筋縄にはいかなかった分、無事出来上
がった安堵と嬉しさはひとしおだ。

生業としての炭焼きは、すで
に遠い昔の記憶になりつつある。
しかし今もなお、炭焼きが出来
る「場」が、ここにはある。
「場」をきっかけとして人が集
い、かつてを思い出したり、思
いを寄せたりすることもできる。
そうした「場」が身近にあるこ
との貴重さを改めて思う。これ
からも一層活かされてほしい。

(香西恵)

上原誠法律事務所のご案内

平成5年度卒 BN 1115 上原 誠

<事務所所在地>

上原誠法律事務所

〒101-0051

東京都千代田神田神保町1-7 日本文芸社ビル7階

TEL 03-3518-9750 FAX 03-3518-9760

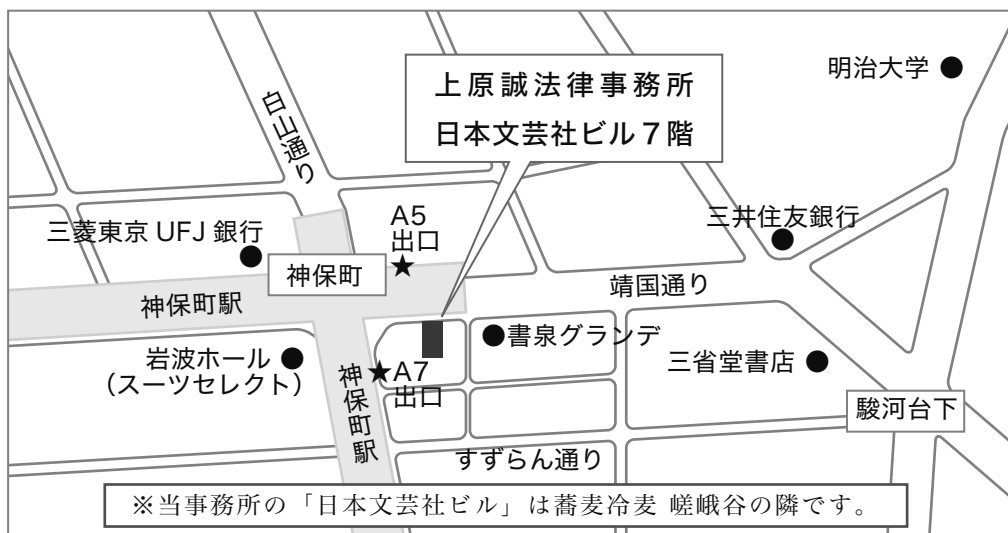
HP <http://uehara-law.com>

E-mail uehara@uehara-law.com

<交通案内>

○東京メトロ・都営地下鉄神保町駅A7/A5出口より徒歩1分

○JR御茶ノ水駅より徒歩7分



■会員情報等連絡先のご案内

住所変更や慶弔事など、なため会々員の動静は左記の総務部宛にメールまたはファックスにて送信していただくか、あるいは直接担当者までご連絡いたします。

総務部アドレス: soumu@natameikai.org

ファックス: 03-5553-4245

小田野 義之(775)

住所: 〒343-0021 埼玉県越谷市大林428-14
電話: 090-12439-13463
メール: y888odano@docomo.ne.jp

訃報

BN 437 小林貞雄OBが2020年2月19日にご逝去されました。
BN 626 西立野一平OBが2020年12月6日にご逝去されました。
ここに謹んでお悔やみ申し上げます。

発行日 二〇二一年一月
編集 住田孔一 猪狩 稔 加藤章一
高田昌也 井上稔也 日暮浩美
発行者 明治大学体育会
ワンダーフォーゲル部なため会
印刷所 三協印刷株式会社